“平和の種”全国へ

非核協 おやこ記者10組

おやこ記者参上!

子どもの目線で長崎取材

8日から10日まで、日本非核宣言自治体協議会(会長・田上富久長崎市長)の招待で、全国から親子10組20人が集まり、被爆63年目の長崎市の平和への取り組みを取材しました。

この事業は、長崎での平和の活動を全国に広めるため、協議会に加盟している240を超える自治体が、親子記者募集の呼びかけをして実現したもの。

「おやこ記者」は8日午後、田上市長へのインタビューで取材活動を開始。「市長が考える平和はどういうものですか」「どういう時に平和だなと感じますか」など、少し緊張した面持ちで質問を投げかけました。

その後、平和の“特ダネ”を求めて被爆者や平和活動をする市民などにインタビュー。9日には長崎平和祈念式典に参列し、取材活動を行いました。

おやこ記者が作った記事原稿をまとめたのが「ナガサキ・ピース・タイムズ」です。

長崎の鐘を鳴らす高校生

響け世界に!!長崎の鐘

平和を願う高校生たち

9日、被爆63周年平和祈念式典の中で、長崎の鐘を鳴らした、長崎商業2年・川辺貴大さんと樋口愛理さんにお話をききました。

鐘を鳴らすきっかけと鳴らしての感想をたずねてみると、川辺さんは「先生からすすめられてすることになりました。式典の中で重要な仕事なのでしっかり鳴らすよう心がけました」。樋口さんは、「良い機会なので希望しました。被爆者や遺族の想いをこめて鳴らしました」。

最後に、「平和を感じる時はいつですか」と聞いたら、「いろんな仲間や家族で楽しく過ごしている時に平和を感じる」と話していました。

私は、式典の中で鐘の音を聞きましたが、とても音がきれいで平和な気持ちになりました。これからずっと世界が平和であってほしいと思いました。【前田利佳記者】

祈りの象徴「長崎の鐘」

平和への祈りを象徴する「長崎の鐘」。式典を終えた平和公園では一般の市民らが鐘を鳴らして、世界平和を願いました。

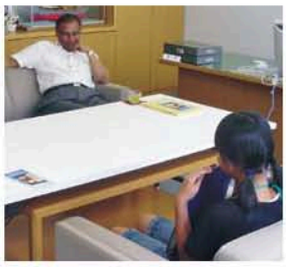
鐘は長崎県被爆者手帳友の会が設置。昨年から、毎月9日午前11時2分に鐘を鳴らしています。ほかにも、ロシアや中国、ハワイに寄贈しています。

おやこ記者の夏目拓真記者も参加し、鐘を鳴らしました。

鐘を鳴らす夏目記者

ダナパラさんに直撃インタビュー!!

わたしは、パグウォッシュ会議会長のダナパラさんに取材しました。ダナパラさんは平和祈念式典に出席するため、長崎に来ました。



ダナパラさんに取材する鈴木記者

カッコイイので、わかさのひけつを聞いてみました。「毎日平和の事を考えているからだよ」と笑って答えてくれました。【鈴木夕海記者】

ナガサキ ピース・タイムズ
非核協 おやこ記者新聞

創刊号

発行者
日本非核宣言自治体協議会
(にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい)
〒852-8117
長崎県長崎市平野町7番8号
長崎市平和推進室内
電話 095-844-9823
FAX095-846-5170
E-mail info@nucfreejapan.com
Homepage
http://www.nucfreejapan.com

2008年
8月9日(土)
NAGASAKI PEACE TIMES

足がビシッとそろってすばらしかった!!

山里小の美しい歌声

「あの子」を歌う山里小学校の8年生

私たちが取材したのは山里小学校の先生と児童のみなさんです。平和祈念式典では、山里小学校の6年生50名が歌いました。曲名は永井隆博士が作詞した「あの子」という歌です。

山里小学校では児童が原爆資料館を見学し、平和の大切さを学んでいます。6年生担任の吉村先生は「今日テレビを見てる人が平和を感じるように歌ってほしい」とおっしゃっていました。

歌い終わった6年生は「4月の後半から練習していたので自信をもって歌えて、いい思い出になりました」と満足そうでした。足がビシッとみんなそろっていて、歌声もすばらしかったです。

【鈴木夕海記者】

届け!!ひまわりの歌

二度と原爆のない世界へ

平和への祈り込めて合唱する被爆者

9日の平和祈念式典で、「被爆者歌う会「ひまわり」」を取材しました。63才から95才までの被爆者62名で構成され、式典開式前に、「もう二度と」と「ねがい」の2曲を合唱されました。

参加者は、「歌っていると、思い出して悲しくなります」と話してくれました。取材のお礼として「命(ぬち)どう宝」を歌いました。私の歌を聞いて、涙を流されている方もいて、平和の願いが伝わり、うれしく思いました。

【野田紗朱記者】

取材する野田記者

冷たいお茶とおしぼりどうぞ

ピースボランティアが配布

お茶を配るピースボランティア

なぜボランティアになったのか聞いてみると、大学2年生のふじ山あやかさんは「高校生の時から活動をはじめ、今年で5年目になります。平和活動の一かんとしてお手伝いをしています」と話してくれました。

大学3年生のいとうさちこさんは今年はじめての参加です。いとうさんのおばあちゃんとおじいちゃんは被爆者です。大学に入って何かやってみたいと思っていましたが、祈りをこめて歌いました」と話してくれました。取材のお礼として「命(ぬち)どう宝」を歌いました。私の歌を聞いて、涙を流されている方もいて、平和の願いが伝わり、うれしく思いました。

【野田紗朱記者】

が、こうはいにさそわれてピースボランティアに入部しました。いとうさんは「ボランティア活動もいいものだ」と言っていました。

長崎市内にすむ男性は「ひじょうにうれしい。ありがたい。おしぼりは数が少ないので、もう少し増やしてくれたらよい。ボランティアは暑い中がんばっていた」と話してくれました。

【夏目拓真記者】

原爆死没者名簿奉安 63年たっても終わらない戦争!!

マイクロフィルムをおさめる上戸さん

9日、平和公園の中にある、原爆落下中心地で行われた「原爆死没者名簿奉安」を取材しました。

今年、被爆者の代表として、原爆死没者名が記録されたマイクロフィルムをおさめた、上戸(かみと)まさとしさんにお話を聞きました。

上戸さんは、中学校に行くとちゅうに被爆しました。そのときのクラスメイトは、40人の内10人しか生き残らなかったそうです。

今日は、その人たちを思い出しながら、「もうけっして戦争をくり返さない!!」ということを願いながらおさめたと話してくれました。

私は、その話を聞いてその日のこわさを知り、いつまでも平和でいてほしいと思いました。

【内藤由莉那記者】

青少年ピースフォーラムで歩く被爆地

ピースボランティアが被爆の跡地案内

浦上天主堂の被爆跡地を見学する参加者

8日、被爆地の真実を見るため、全国17都道府県31自治体が派遣した平和使節団(小学生から大学生)等と、長崎市青少年ピースボランティア(高校生から30才未満)が、長崎原爆資料館に集まり、フィールドワークを行いました。これは平成5年に始まったもので、今年で16回目です。

ピースボランティアと共にまず爆心地公園へ行き、毎年8月9日に原爆死没者数が更新される原爆落下中心地碑、移築された浦上天主堂の壁の説明を受けました。

次に向かった浦上天主堂で見た被爆した聖人の石像、指が欠けた悲しみのマリア像などから、原爆の恐ろしさが伝わってきました。

爆心地公園や旧長崎医科大

札幌市民のメッセージを壁にかける訪問団

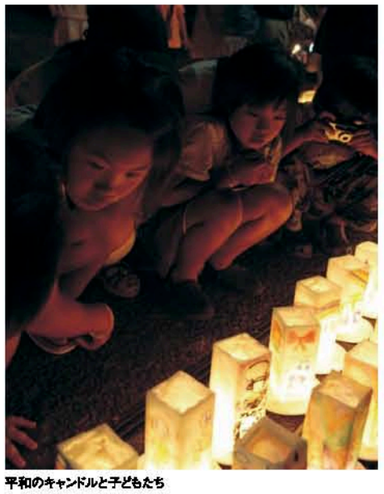
また、札幌市平和訪問団は、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館に札幌市民からのメッセージを届けました。訪問団の一人、6年生の山崎恵理佳さんは「当時の人は真実を知らないで亡くなったと思うが、私たちは知ることができて幸せ。自分たちが知ったことを伝えたい」と語ってくれました。

主催者の青少年ピースボランティア・明時紗耶香さんに、ボランティアをする理由を聞いたところ、「被爆者の祖母の影響があり、全国の人に原爆のことを伝えたいと思ったから」と答えてくれました。

みんなそれぞれの思いがあってここへ来ていることがわかり、ボランティアをする側も深く考えることができたと思いました。

【田畑のぞみ記者】
【曽我龍宇一記者】

6000個のキャンドルに込めた平和への願い


平和のキャンドルと子どもたち

8日夜、平和公園内の平和の泉では市内37の小学校、13の中学校の生徒が作製したキャンドル約6000個に火がともされ、キャンドルがライトアップされました。おやこ記者も参加し「平和な日が続きますように」というメッセージと思い思いの絵をキャンドルに書きこみました。

ライトアップ後は、平和の泉ステージ上で平和の灯(ともしび)コンサートが開催され、爆心地近くの城山・山里小の児童と江平中の生徒による合唱が行われ、夜空に平和を願う歌声が響きました。

【夏目貴之記者】

キャンドルにメッセージを書き込む小野記者(左)と田畑記者

平和公園にともされた約6,000個のキャンドル

田上長崎市長に質問する雷原記者

田上市長がおやこ記者と会見!

8日、全国からのおやこ記者を迎えて、田上富久長崎市長の会見が開かれました。

長崎市で初めての試みとなるおやこ記者事業には、385組の応募があり10組が選ばれました。今回訪れた小学生たちは2年生から6年生まで。会見では市長がタジタジとなるほどの質問が続きました。この会見には被爆者の吉田勝二さんも同席。初めて被爆体験談を聞く小学生記者たちは、幼いながらも真剣な表情を見せました。

おやこ記者の皆さんは、3日間に渡って記事作りを行い、帰宅後、各首長に取材報告をする予定です。

祈りの火に願いこめて

キャンペーンに参加する内藤記者

9日、ながさき平和の日に、平和公園のまわりでは、いろいろな平和活動が行われていました。

一つは、「核廃絶の壁 木のブロック・キャンペーン」という、ドイツの若い人たちが始めた活動です。木のブロック(つみ木)に、平和へのメッセージをいろいろな人たちから書いてもらっていました。

また、「長崎を最後の被爆地とする誓いの火」は、昭和58(1983)年にギリシャから長崎市民に贈られたもので、毎月9日にともされます。今日9日には、自分で折ったつるを灯火台にはり、平和を祈るもよおしをしていました。

私は、二つの活動への参加をとおして、いつまでもいつまでも平和が続いてほしいと心から思いました。

【内藤由莉那記者】

わたしたちも忘れない「9日」への誓い新たに

長崎市立 城山小学校

城山小学校「かよ子桜」

城山小学校データ
原爆落下中心地より500メートル。1,400余名の児童と職員が犠牲に。毎月9日、平和祈念式を行っています。校内に、被爆校舎、原爆殉難者の碑、少年平和像、かよ子桜、カラスザンショウ、二股クスなどがあります。
『かよこ桜』(山本典人著、新日本出版社)等出版されています。

城山から平和を発信！

原爆の悲しさ伝える「かよ子桜」

城山小学校では毎月9日に平和祈念式が開かれ、今回は第685回目。全校の児童は、亡くなった約1400人の先ぱい達のことを思いながら体育館に集まりました。第1部では、児童の歌声やリコーダーの音が体育館にひびきました。第2部、城山小学校原爆殉難者慰霊式に入りました。城山小学校卒業生、元職員などが献花や献鶴などをしました。その間、児童達は平和の学習をしていました。第3部は校庭にある「かよ子桜」の前で行われました。1つのクラスに1つ、平和の願いが発表されました。「1人1人は宝物。みんなの笑顔を大切にします」や「友達を大切にするほくらのクラス」などがありました。11時2分には全校児童が黙とうをしました。

校庭のすみの「かよ子桜」には悲しい物語があります。当時、城山小学校に学徒動員できていたかよこさんは、原爆のせいで、校内で亡くなりました。生き残った母は娘を思い、50本の桜を植えました。現在6本になっている木は、来年で60才です。この学校には悲しい思いがつまっていると思いました。

【田畑のぞみ記者】

枡田忍校長先生のお話を聞いてきました。

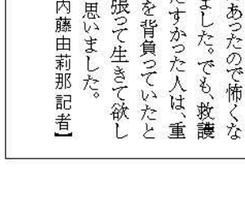
校長先生の「平和をもとめる上で、相手の話を聞く事が出来る事が大切です。主張ばかりしていたらけんかばかりになってしまう」という言葉が心に残りました。

【鈴木夕海記者】

枡田忍校長先生

山里小学校の平和学習

城山小学校の平和集会


平和祈念式典に「千羽ペンギン」を持ってきた大田美智子(左)さん

ペンギンの折り紙に託す平和の願い

ペンギンが大好きな兵庫県の大田さんは、長崎ペンギン水族館の職員と始めたペンギン折り紙作りを通して平和の尊さを伝えています。

「ペンギンは、異なる種類でも争わない性質を持つ鳥です。私は平和の思いを込めてペンギンの折り紙を折っています。中学校の生徒会、障害者団体など、市民レベルでペンギンの折り紙作りが広まっているのがうれしい」と語ります。今年で7回目の参加となり、今年は過去最も多い4万3千のペンギン折り紙を式典会場に飾りました。

【夏目拓真記者】

平和の鐘が鳴る小学校

平和を祈り、広める心を育む

山里小は「ながさき平和の日」の9日、学校で平和学習をして、原爆の恐ろしさと平和について勉強しました。8時すぎから、家庭から持ちよった花を「あの子らの碑」に献花して教室に向かいます。

平和祈念集会に、亡くなった人のごめいふくを祈るとともに、平和の大切さを願って全校児童が出席しました。集会は、校内にある平和の鐘が鳴る中、児童が集まり、全校児童で平和を望み大切さを学び、守り続けることを誓います。午前11時2分、鐘が静かに鳴る中、黙とうを捧げました。

校内には、平和を語りつぐ場所として、展示資料室が整備され、防空壕跡が残されており、「あの子らの碑」には平和への思いを込められた折り鶴が捧げられています。

午前11時2分にサイレンが鳴った時は、63年前を想像してゾッとしました。「平和」とは何だろうともう一度考えたいでした。

4年3組では、「おこりじぞう」を題材に、心に残った場面や感じたことの感想を発表していました。

松添先生は、「長崎市の児童である君たちが、この原爆の恐ろしさを日本中で一番知らないといけない」また、「自分で今できる事は何かを考える一日にして下さい」と心をこめて話していました。

【前田利佳記者】
【中村葉乃花記者】

活水高校の平和集会

して、人々が持っている「おびえ」が無くなれば、平和への実現につながると思います」。

今日の平和集会を見て、活水高校は核兵器廃絶と平和についての関心が高いことを、僕は知りました。

【曽我輪宇記者】

山里小学校「あの子らの碑」

山里小学校データ
被爆当時の人員の被害は、当日の在校者32人のうち、校長以下職員26人、用務員2人が死亡、生存者は4人。被爆によって児童1,581人のうち約1,300人がなくなりました。現在、防空壕跡、児童記念館の資料室、「あの子らの碑」などがあります。

後輩に伝えたい命の尊さ

平和集会の活水高校

9日の午前、パイプオルガンの鳴り響いている活水高校で平和集会がありました。そのような中、高校生二万人署名活動の一員である尾田彩歌さんへインタビューをしました。

まずは、平和集会で学んだことをこれからどのようにしていきたいかを聞いてみました。「平和集会で学んだことを後輩の人に伝えなければいけないと考えています。そ

あの日の記憶そのままに… 被爆の傷跡を探して

救護所メモリアル

未来へ語りつぐ資料室

住所:長崎市興善町

再現された救護所

8日、長崎市内の「立山防空壕」と、長崎市立図書館の中にある「救護所メモリアル」を訪ねました。

立山防空壕は、思ったよりも寒く、1つ1つの部屋が広かったのが印象的でした。

管理人の竹田さんの話では、立山防空壕は県の防空本部としてたてられたもので、爆心地から3キロ以内のきょりにあるのですが、こわれずに残っています。

被爆者を治療した部屋を再現した「救護所メモリアル」は、図書館という人がたくさん集まる場所にあるので、おどろきましたが、誰でも見る事が出来るので、いいなと思いました。

ここで上映される被爆証言フィルムには、悲しい場面がたくさんあったので怖くなってしまいました。でも、救護所で命がたすかった人は、重いしょう害を背負っていたとしても、頑張って生きて欲しいと心から思いました。

【内藤由莉那記者】

立山防空壕

ひと目でゆがみが分かる柱

創業天保元年！ 岩永梅壽軒に行ってきました

住所:長崎市銅座町(爆心地から約3キロ)

長崎らしいお盆菓子

わたしたちが取材したのは、天保元(1830)年にできた和菓子屋さんです。取材に応じてくれた方は、岩永徳二さん。59才の方なので原爆は体験していませんが、四代目の祖父は原爆症で亡くなったそうです。

爆心地から3キロはなれたお店でも、爆風で人が飛ばされて、たたみが「へ」の字に持ち上がったそうです。また、お店に柱時計があるのですが、なんと土台から3センチも爆風でずれていました。ほかにも、お店にある大黒柱が爆風で曲がってしまいました。

お店には「すいか」、「ほうずき」、「れんの葉」などのお盆菓子があります。このお盆菓子には「すいかはのどの渇きをうるおす水筒」、「ほうずきはちょうちん」、「れんの葉はかさ」という意味があります。ほかにもカステラなどすごくおいしのでぜひ食べてみてください。

【鈴木夕海記者】

世界に広がれ！長崎の声

被爆者 吉田勝二さん
（よしだ かつじ／76才）

未来の平和は君達にかかっている!!

8日、平和会館2階ラウンジでお話を伺いました。吉田さんは、井戸の水を飲もうと手を伸ばした瞬間に被爆し、右耳を吹き飛ばされたそうです。私が「ケガはまだ痛みますか」とお聞きしたところ、「特に冬場は、傷が割れて痛いです」とおっしゃっていました。

私はお話を伺って、自分が吉田さんの立場だったら、どんなにつらく、悲しい気持ちがするだろうと思いました。

【冨原綾乃記者】

吉田さんの体験を中学生がまとめた絵本の一場面

ピースバトン・ナガサキ 白鳥純子さん
（しらとり じゅんこ）

子どもたちに語り継ぐ被爆体験紙芝居

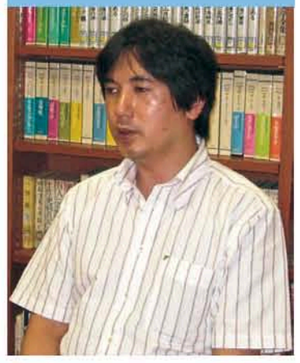
平和会館で吉田勝二さんと白鳥純子さんにお話を聞きました。吉田さんは、「長崎が最後の被爆地になるように、原爆にあった苦しみを皆に伝えていきたい」と話してくれました。

紙芝居で被爆体験を伝える白鳥さん

白鳥さんは、戦後生まれで被爆者ではありませんが、吉田さんの体験を基にした紙芝居をしてくれました。お話を聞いて、なぜ、人を傷つけたり悲しませたりするのだろう。みんな仲良くすれば、平和になると思いました。私は、二人の思いをしっかりと伝えていきたいです。

【野田紗朱記者】

永井隆記念館 永井徳三郎さん
（ながい とくさぶろう）



祖父の平和の祈り願いを父から受けつぐ

永井徳三郎さんは祖父永井隆博士の言葉「如己愛人」の精神で自分のことのように他人を愛すること、人が人にやさしく、仲よくするという単純なことが、平和につながるとおっしゃいました。祖父の生き方について、「つらい時でも自分をぎせいにした祖父は、すごく根性を持った人で自分にはできない」と話しました。

記念館の横には、博士が亡くなるまで寝たきりで、自分の病気の研究と平和を願いつづけたたたみ二畳の如己堂がありました。

なぜ館長になったのかとの質問に、「館長だった父が亡くなり、祖父のメッセージを伝えていくことが親孝行」と答えてくれました。博士の「敵も愛しなさい」という言葉には驚きましたが、平和への祈りがすごく伝わりました。

【中村菜乃花記者】

永井博士が過ごした如己堂

あなたにとって平和を感じるのはどんな時ですか？

取材【冨原記者】

きっかけは、9.11！

ずっと離さない！

これが、一番♥

未来のためにできること

高校生 1万人署名活動

署名に関わる人々の「思い」を知りたい

署名活動をする高校生

炎天下の中、長崎駅前で高校生一万人署名活動をやっていました。

この活動は、高校生が街頭で署名を集め、その署名を高校生平和大使が国連に届けます。署名は永久保存されます。

署名を呼びかける側と署名をする側、両方のやろうと思った理由を聞きました。

署名を呼びかける側は「先輩の活動を見て、やりたいと思った」（活水高校3年・尾田彩歌さん）、「1人でも役に立てたらいいと思った」（韓国から署名活動のため来日中の高校生・チョ ジェヒョンさん）。

署名をする側は「力になれたらいいと思った」「協力したいから」などがありました。

このように両方とも、核兵器廃絶と平和への思いがあることがわかりました。

【曽我龍宇一記者】

平和案内人 吉田敬三郎さん
（よしだ けいざぶろう／76才）

「図書館での読書」に平和を感じます

資料館で案内する吉田さん

原爆資料館で吉田敬三郎さんにお話をききました。吉田さんは、平和案内人として資料館で「なぜ長崎に原爆が落とされたのか」「原爆について」「原爆による被害」をわかりやすく説明しています。

はじめた理由と時期をたずねたら、何かグループ活動したいという思いがあり、72才から始めたそうです。また、平和を感じる時をたずねると、「図書館の静けさの中で時間のたつのも忘れて自分の世界にふけって読書をすることが今一番の平和だと感じている」と話していました。

私も資料館の中で吉田さんの話を聞きましたが、戦争のおそろしさと、命の大切さについて、じっさい自分の目で見て話を聞いて本当におそろしいものだと感じたので、学校のみんなにわかってもらえるよう、わかりやすく説明したいと思いました。

【前田利佳記者】

マンガ家 西岡由香さん
（にしおか ゆか）

「地球を知りたい」から平和活動へ

西岡さんが描いた「夏の残像」

マンガ家の西岡由香さんにお話を聞きました。ピースボートの世界一周に参加した時、みんなが自分の好きなことで交流をしていました。そこで友人に原爆の資料を送ってもらい、船の中で長崎の話をしたことが初めての平和活動だったと話してくださいました。

自分に出来ることとして原爆のマンガをかこうと決心しましたが、当時を舞台にするのは想像でしかなく、体験していないとわからないという思いから、現在を通して平和を考えるストーリーにしたそうです。「原爆を知ってほしい。今すぐでなくても、平和を考えるきっかけになってほしい」というメッセージがこめられています。

「自分をぎせいにするのではなく、自分が元気になれる平和活動をすることが大切」。

この言葉が西岡さんの平和活動への力だと感じ、心にふかくのこりました。

【小野泉海記者】

熊本からいらした被爆者の父をもつ桜尾さん

平和を感じるために会場を訪れた長崎大学放送研究会

大阪で平和活動をしている木下貴弓さん

ベラルーシから長崎大学へ医療研修中のスクラタウ・アリャクサンドルさん

福岡からピースフォーラムに参加の財津さん

取材【小野記者】

東京都町田市
鈴木 夕海さん(6年生)
夕子さん

私達は初めての長崎にわくわく気分で来ました。だけど、取材しているうちに原爆で今も傷ついている人がいる事にびっくりしました。今も核兵器を持っている国がある事のおそろしさを知りました。私は平和宣言の大切さを学んだ気がします。

愛知県稲沢市
内藤由莉那さん(4年生)
陽子さん

編集は、行数がきまっていたので、うまく自分の思っていることをまとめるのがとてもたいへんでした。だけど、たくさんの方にインタビューすることができ、とてもたのしくていい勉強ができました。

大阪府茨木市
冨原 綾乃さん(2年生)
美恵子さん

長崎はとてもあつかったけれど、63年前、原爆がおとされた日もこんなにあつかったのかなあ、という思いがよぎりました。おりづるがたくさんかざってあって、多くの人が平和を願っているんだなあ、とかんじました。

千葉県松戸市
夏目 拓真さん(3年生)
貴之さん

原爆について、人にインタビューしたり、写真を見たり、被爆した建物を見学したのしかった。

おやこ記者の取材を通じて、長崎の生の姿を感じられた事をうれしく思います。

東京都中野区
小野 泉海さん(2年生)
幸子さん

平和と思う瞬間は人それぞれ違い、平和活動も自分ができることからやっていけばいいと知りました。

東京に戻り、長崎で出会った方々からいただいた言葉を力に、親子で今回の体験を伝えていきたいです。

京都府宇治市
田畑のぞみさん(5年生)
みどりさん

この2日間、ハードスケジュールだったけど、カメラやインタビューを体験して、記者っておもしろい仕事なんだなーと思いました。色々な人にインタビューしてがんばったので、みんなに平和が伝わると思います!

大阪府寝屋川市
中村菜乃花さん(5年生)
百合さん

原爆について良くわからなかったけれど、長崎に来て、今がとても「平和」という事に気づいた。仲良く、人にやさしくなど、ささいな事が「平和」につながるので、平和を目指して少しずつでも行動したい。

千葉県松戸市
曽我龍宇一さん(6年生)
和弘さん

おやこ記者をやって、平和の大切さや原爆のおそろしさについて、より深く知ることが出来ました。また、取材は楽しかったです。このような企画を立ててくださってありがとうございます。

山梨県甲州市
前田 利佳さん(4年生)
政彦さん

長崎の暑さと記事編集者闘の熱さの3日間。五感を全て作動させ、かけがえのない平和を体感。「今生きていることが平和なんだなあ」と娘の一言。これからの次世代へもつなげていきたい、平和という意味を!!

大阪府枚方市
野田 紗朱さん(3年生)
成美さん

なんで原爆や爆弾を落とすのだろう。原爆とか爆弾は人を殺す為のものなのに、なぜ作られたのだろうと思いました。原爆にあった人達が心をこめて歌っていました。まるでひまわりが咲いているようでした。

イメージキャラクターの紹介
はじめまして! ナビタンズです

「長崎らしいキャラがいいよ」。編集会議で生まれたペンギンの親子「ナビタンズ」。ボランティアスタッフのイラストレーター、林田志帆さんが長崎市ゆかりの鳥、ペンギンをアレンジして制作。ライターの林すみこさんが命名しました。末永くよろしく!

事務局だより

10組のおやこ記者が8月の暑い長崎をかけめぐりました。初めての体験に、みんな、どきどきしながらも元気いっぱい取材をしてきてくれました。

「ナガサキ・ピース・タイムズ」には「平和の特ダネ」がいっぱいです。みなさんの心の中で「特ダネ」は「平和の種」となり、いつか大きく育つはずです。

次号は、来年の夏。おやこ記者の活躍をご期待ください。